

# SOAS Language Centre Intermediate Japanese Class Projects 2010-2011

## 注文の多い料理店

メリッサ・テイラー's version

ここは、山の中です。

若い男が二人、歩いています。鉄砲をもって、白い大きな犬を二匹つれています。

二人は、もう何時間も山の中を歩いています。

一人が言いました。

「どうしてこの山には動物がいないんだ？鳥もいないし、うさぎもいない。つまらない。」

もう一人が言いました。

「この鉄砲で、鹿をパパーンと撃ちたいなあ。きっと楽しいだろうなあ。」

二人は東京から来たのです。二人は、小さい村にある旅館に泊まっています。

一時間前まで案内の人も一緒に歩いていたのですが、どこかへ行ってしまいました。

木がだんだん多くなってきました。木の葉がたくさん落ちています。

白い大きな二匹の犬が急にバタンと倒れました。二人はびっくりして、犬のそばに行きました。犬は死んでいました。

「この犬は、30万円だったんだ。」

「僕の犬も高かった。」二人は残念そうに言いました。

それから、一人が言いました。「おなかがすいた。僕はもう帰ろうと思う。」

もう一人も言いました。「寒くなったし、足が疲れたから、僕も、もう帰ろうと思う。」しかし二人は道がわからなくなりました。

「でもどの道を帰ればいいのかしら？」

急に強い風が吹いてきました。

「どうどうどう」大きな音です。

草が「ざわざわざわ」

木の葉が「かさかさかさ」

木が「ごんごんごん」

山が大きな音を出しています。

二人は、「おなかがすいた。何か食べたいなあ。」「もう歩きたくないなあ。」と言いました。

そのとき、二人が後ろをみると、そこに大きな家がありました。

大きな家の入り口に、料理店「山猫軒」と書いてあります。

「あ、レストランだ！」

「山の中にレストラン？おかしいな。でも何かたべることができるぞ。」

「もちろんできるさ。」

二人はとてもおなかがすいていました。

「何か食べたい。早く入ろう。」

「うん入ろう。」

二人は家の前に立ちました。家の戸には、金色の字でこう書いてありました。

**だれでも入ってください。どうぞ。**

二人は喜んで言いました。

「よかったなあ。今日は、一日たいへんだったけれど、こんなにもいいこともあるんだな」

そして戸をあけて中へ入りました。

そこには長い廊下がありました。二人は廊下を歩きました。

少し歩くと青い戸がありました。

「変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるんだろう？」

「寒いところや山の中の家はみんなそうなのさ。」

二人が戸をあけようとするすると戸に黄色い字で、こう書いてあります。

**ここは注文の多い料理店です。**

この料理店には、お客さんがたくさん来て、「これをください」「あれをください」と料理をたくさん注文するのでしょう。

「こんな山の中だけど、お客さんが多いんだね。」

「いい店はみんなそうさ。東京のいいレストランも、にぎやかなところじゃなくて、静かなところにあるよ。」

「早くテーブルのある部屋に行きたいなあ。」

二人は 戸をあけて、廊下を歩きました。

廊下を進んでいくと、二人は、薄暗い部屋に着きました。

そこには、テーブルはなく、大きい囲炉裏（いろり）があり、そのまわりに人がたくさん 座っているのが見えました。

「へんだなあ。あそこにいるおばあさんは、ちょっと知っているおばあさんのようだよ。」

「ああ、そうかい。そういわれると、あのおじいさんは、うちのじいさんみたいだよ。」

二人の 獵師は、囲炉裏（いろり）の近くに座りました。そして、獵師の向こう側にいる年寄りをじっと見つめていました。するとすぐに、使用人が枡（ます）と徳利（とっくり）を二本もってきました。そして、枡にお酒を注ぎました。

獵師のひとは、「あまり温かくないなあ。」と言いました。「寒いところで、山の中だからかもしれないが、どうしてこんなに酒が冷たいのかなあ。」

もうひとりの獵師が言いました。「この店にはいつもは、立派な人が来るんだろうな。この酒は普通の酒じゃないからね。特定銘柄のすばらしい酒だよ。こういう酒は冷たいほうがいいんだよ。」

「そうだね。本当にすばらしいお酒だね。」そして、徳利を持ち上げながら 「あのう、すみません、お酒、もう二本をください。」と言いました。

そのまま二人は、その部屋で一夜を越すことにしました。

いくつも徳利を空けたあとで、突然、近くに座っているおばあさんが 獵師のひとりに「光国ちゃん」と話しかけてきました。

おばあさんの言葉にびっくり仰天して光国は、おばあさんの顔を見返しました。

おばあさんは、「光国ちゃん、私だよ。あんたのばあちゃんだよ。」と言いました。

「まさか、ばあちゃんのはずがない。おれのばあちゃんは三十年前に死んじゃったからね。」光国はすこし飲みすぎて、ちょっとよっぱらったのだと思いました。

おばあさんは、「それは、そうだけでも、わたしだよ、あんたのばあちゃんだよ。」と言いました。

光国は、ばあさんをまじまじと見て、実の祖母がだったかどうかを確かめました。

もうひとりの 漁師は、飲みすぎて、もうすやすや寝ていました。

彼は不安そうにあたりをきょろときょろと見回しました。それから、まわりのみんなを見ました。

おどろいたことに、そこにいたお客さんはみんな年寄りで、なつかしい顔ぶればかりでした。囲炉裏の向こうには、むかしの伯父がいて、左にいたのは、父でした。

すると、さっきのおばあさんが、また近寄ってきて、「光国ちゃん、この根付けは私のじいちゃんの根付

けだよ。1868年の明治維新の前に買ったんだよ、あんたに あげる。」と言いました。

明るく朝になって、光国の酔いはだんだん覚めてきました。

そして、気が付いてみると、自分は、もうひとりの獵師と並んで野宿をしていました。

そして二匹の犬は、二人の足元で寝ていました。

そばに鉄砲もありました。

獵師の頭の中は混乱していました。しばらくたって、すこしずつ前夜の薄気味悪かったことを思い出しました。

あれは、夢だったのか。

でも、不思議なことに、手をコートのパocketの中に入れたら、昨日の晩ばあさんにもらったあの根付けは、まだ入っていました。

#### ことば

鉄砲	てっぽう	gun
鹿	しか	deer
撃つ	うつ	shoot
廊下	ろうか	corridor
薄暗い	うすぐらい	dim, dark
囲炉裏	いろり	Japanese open hearth
徳利	とっくり	sake bottle
枡	ます	wooden square measure
一夜を越す	いちやをこす	spend a night
特定銘柄	とくていめいがら	particular brand
見回す	みまわす	look around
根付け	ねつけ	netsuke carving
明治維新	めいじいしん	meiji restoration
野宿	のじゆく	rough sleeping, camp out
足元	あしもと	at one's feet
混乱	こんらん	confused
前夜	ぜんや	the night before
薄気味悪い	うすきみわるい	bizarre, eerie
不思議なことに	ふしぎなことに	curiously enough